

誰が，どんな思いで，誰に残すのか

——市民運動にとって市民活動資料とは何か

安東 つとむ

はじめに——記録に残らない忘れられぬ人びと

- 1 道道臨海線の埋め立て工事と小樽運河保存運動のはじまり
- 2 小樽運河保存運動の転換点——峰山富美さんとわかものたちの登場
- 3 「ポートフェスティバル」の成功と「水辺で生きる夢あるまちづくり」への発展
- 4 運河再生とまちづくり運動の進展，そして保存運動の終焉
- 5 小樽運河保存運動の成果と教訓を生かしたその後の市民・住民運動——鞆の浦の例
- 6 阪神淡路大震災で「もっとも貴重」と言われた情報紙「デイリーニーズ」
- 7 「霞ヶ関一丁目の奇跡」を生んだ“やっけて楽しい運動”

おわりに——誰の，どんな思いを，誰に残すのか

はじめに——記録に残らない忘れられぬ人びと

小樽には、いま年間800万人の観光客が訪れている。小樽運河沿いの石造倉庫群，ガス灯，石造倉庫を改装した多くの店舗。そして季節ごとに街を彩る祭。いまの小樽をどう感じるかは別にしても，小樽は北海道有数の観光都市となり，運河をめぐる石造倉庫群は無形文化財として近代の小樽や北海道の歴史を物語る貴重な歴史遺産となっている。

観光化が激しいとはいえ，運河と石造倉庫群，日本銀行北海道支店をはじめ，街に点在する明治期，大正期の建造物，それらを抱いた街並み，山から眺めると，一気に海に向かって坂道が下がっている風景はいまだ昭和以前からのまちを彷彿とさせる。かつて小林多喜二が友人への手紙でうたったように。

「冬が近くなるとぼくはそのなつかしい国のことを考えて深い感動に捉えられている。そこには運河と倉庫と税関と棧橋がある。そこでは人は重々苦しい空の下を，どれも背をまげて歩いている。ぼくは何処を歩いていようが，どの人をも知っている。赤い断層を所々に見せている階段のように山にせり上がっている街を，ぼくはどんなに愛しているか分からない」

その小樽の風景は，もしかしたら残されていなかったかもしれない。小樽運河など市の市史にしか存在しなくて，街は札幌に抜けるただっ広い道路が走り，石造倉庫群などとっくになくなって，道路沿いにはガソリンスタンドやコンビニや自動車関連会社の建物しかない。要するに日本全国の

どこにでもある車の通過都市になっていたかもしれない。

それが、1966年に事業決定された「道道臨港線」の道路計画であり、1971年から本格着工された運河埋め立てと有幌地区の石造倉庫群の大規模な破壊工事だった。

いま、小樽運河が残っているのは、よく知られているように、小樽運河保存運動の成果である。ただ、反対運動の歴史には、それらの人がいなかったら今の状態はあり得なかったというきわめて印象的な人びとと市民運動があった。それは、公式の記録には残っていない。ごく一部の残存する記録と、運動を担った人びと、第一線にいた人びとの記憶に残るだけである。

本稿は、それら小樽運河保存の市民運動の、きわめて印象的だったリーダーの人びとが生み出した運動の成果と、その後の市民運動に与えた影響など、記録に残らない市民運動の記憶を書き残しておくことが目的である。

1 道道臨海線の埋め立て工事と小樽運河保存運動のはじまり

「これでは自分たちの愛した小樽がなくなる」。運河を埋め立てて6車線の道路をつくる道道臨港線の工事に伴う急ピッチの埋め立てに危機感を感じた市民たちによって「小樽運河を守る会」（以下「守る会」）が発足した。1973年（昭和48年）12月4日のことである。これが小樽運河保存運動の出発点であった。

当初の運河保存運動は、ノスタルジックな面が多かったという。1974年の「守る会」のチラシには「『運河』を残そうとする市民の心には、やはり懐古的な情趣の面が少なからずあることは事実です」と書いている。それでも小樽運河に寄せる愛情は強く、「守る会」の設立総会には市民会館ホールに1,200名の出席者を集めている。

1973年のオイルショックによる公共事業抑制の流れの中で、小樽運河埋め立て工事も一時ストップし、保存運動は活気づいた。

この時期、運河保存支援運動は全国に広がり、保存署名は2万4千名を越えた。（守る会事務局長・藤森茂男氏の講演 1976年10月）

しかし第1期の運動は藤森茂男事務局長の辞任、越崎宗一初代会長の自殺という出来事により停滞していく。越崎会長の自殺には、市当局の仕事上の圧力という噂が絶えなかった。のちに会長となる峰山富美さんも「保存運動をやっていると商売上の仕事を回さないというような圧力もあったようです」と語っていた。（朝日新聞 1984年6月20日）

2 小樽運河保存運動の転換点——峰山富美さんとわかものたちの登場

運動の停滞を大きく変えたのが、峰山富美さんの「守る会」会長就任と、それを支えるわかものたちの登場である。

峰山さんは、前会長越崎氏が1976年に自殺したあとを継いで1978年に会長となった。指導者の辞任などで停滞していた運河保存を立て直し、保存の声を上げ続け、全国町並み保存連盟への加入などで全国に運動を広げ、「全国町並ゼミ」でも運河保存を熱く訴え支持を広げ、1980年には小樽

で町並みゼミを開催することにも成功した。また、文部大臣など国も「小樽はかけがえのない文化遺産」と発言していた。停滞した運動はふたたび盛り上がってきた。

その盛り上がりをつくり、保存運動の大きな転換点を生み出したのは、新しいわかものたちの群像である。その姿を書き残しておこう。

1975年12月の夜、一人のわかものが小樽駅に降り立った。学生運動に挫折した彼はカナダに移民することになっていた。移民のための書類選考をパスし、2月には面接を控えていた。その前に日本全国を見て回ろうと考えて、最初に訪れたのが小樽だった。

「小樽に降りたら子どもも老人も平気で道路を渡る。街中が路地みたいで、こんなおおらかなところがあるんだと思った。日本のどこでも港は港湾関係者以外は入りにくいのに、小樽の港は普通の市民でも自由に出入りしている。港で釣りをしたら魚がいっぱい釣れるし、山から見ると海まで真っ直ぐ坂道が続いている。こんな良いところはないと思った。」

そうして27歳の山口保さんは小樽に住みつくことになった。

その山口さんを運河保存運動に引き込んだのは、1976年7月に小樽市内の大國屋デパートで「小樽運河保存のための港湾再開発と運河再利用計画展」を開いて、「運河周辺を都市生活者の、“息抜き”の空間、開放された水辺の復活ととらえ、運河、石造倉庫・工場群の景観を生かしたユニークな再利用計画を提起」した北海道大学大学院生らのグループの石塚雅明さんと柳田良造さんである。

彼らは「守る会」の運動が壁にぶつかっていたので、運動を担う新しい力として若い人をさがしていた。そのころフォークソングのグループをつくってコンサートを開いていた山口さんに目をつけ、コンサートが終わったあと、山口さんのアパートで運河の保存運動について説明した。それは都市における水辺の価値、都市のアメニティを強調する話で、山口さんは感動した。そこから山口さんの運河保存と小樽のまちづくり運動への取り組みが出発した。1976年10月のことである。

山口さんが小樽に来た同じ月のクリスマスの日、小樽駅の近くの「静屋通り」に喫茶店がオープンした。小樽特有の木骨石造倉庫の内部を改装した独特の建物のその店の名は「叫児楼」。オーナーは佐々木興次郎さん。当時25歳だった。

佐々木さんは斜陽の都市、保守的で頑迷な「だれも誇りをもっていない小樽」が大嫌いだった。しかし、ヨーロッパを旅しているうちに、オランダのアムステルダムで「運河につながれている古い船、その船内は画廊やレストランになっている。運河沿いの建物はブティックやディスコに利用されている。これは小樽の風景ではないか」。

それが佐々木さんが小樽に戻って「叫児楼」を開いた理由だった。

同じ頃、「叫児楼」から100メートルほど離れた静谷通りの蕎麦屋「藪半」の長男が東京から帰ってきた。東京で学生運動を続け、体を壊して小樽に帰ってきた。26歳の小河原格さんだった。

「小樽に帰ってきたら、街の人は集まっては小樽の悪口を言っていた」。そんな小樽を誇りを持って街にしよう。その思いから生まれたのが、「ポートフェスティバル」という、運河の水辺でわかものたちがお祭りを楽しむというイベントだった。それが運河保存運動の転換点だった。そしてこれが、のちのちの市民運動の展開や評価につながっていく歴史的に見ても大きなポイントだった。

3 「ポートフェスティバル」の成功と「水辺で生きる夢あるまちづくり」への発展

1978年に始まったほとんど素人たちによる「ポートフェスティバル」は、第1回目の1978年7月の2日間に、10万人が参加して、小樽市の行政を驚嘆させた。

もともと「叫児楼」などに集まるフォークやロックが好きなわかものたちが、貸しスタジオもない小樽で音楽を表現する場を求めていた。それを運河などの水辺でやればいい、小樽市民が運河に親しめるように、運河のはしけでロックコンサートをやる。家族で楽しめるイベントを開いて、運河沿いには出店を出して、一日中楽しめる場にしよう。それが「ポートフェスティバル」だった。運河保存運動の裾野を広げていくことにもなるという意識もあった。

10万人というのは、当時の小樽市の人口の3分の1にあたる。さして問題にしていなかった小樽の行政がショックを受けたのは当然である。

さらにわかものたちは「小樽・夢の街づくり実行委員会」を立ち上げた。ここではっきりと、単なる運河保存運動ではなく、「小樽の街づくり」という姿勢が明確になった。北大グループが1976年に提案した「運河・石造倉庫の景観の活用」を受け継いだ街づくりの夢だった。それは、市民運動が、たとえば運河保存それ自体をいつのうらただけでなく、運河に人びとをなじませて、運河や水辺の環境に生きていることをしみこませていくという効果をもつイベントだった。

「夢の街づくり実行委員会」(以下「夢街」)は「私たちはこの古き良き街並みを再生した新しいわが街・小樽づくりという視野に立ち、生活の場としての再開発を提案し、実行」と宣言している。(「夢街」発行冊子「ふいえすた小樽」創刊号 1978年)

第2期のわかもの主導の保存運動の目的意識ははっきり「街づくり」としている。それは運河や環境への郷愁で保存を進める年長の人びととともに、これからこの街で生きていくわかものにとっても魅力ある提言にもなる。

また、「守る会」の運動がともすれば「アカの運動」と見られがちで広がりをつくれない状況を変えるため、保守層や一般商店主まで広げることを意識していた。

4 運河再生とまちづくり運動の進展、そして保存運動の終焉

彼らは運河の保存と、その周辺における街づくりのために、創意工夫でさまざまなイベントを仕掛けた。「運河問題とまちづくりに関する総合的な学習の場づくりとしての『小樽運河研究講座』、まちづくり運動の機関誌と地域情報誌としての役割をもつミニコミ誌『ふいえすた小樽』の発行、小樽の歴史的な町並みと建物に散策をつうじて親しみ、再発見するタウン・オリエンテーリング、子どもへの環境教育の試みとしての運河を題材にした紙芝居」など、市民の誰もが参加でき、共感を呼び、歴史環境に対する意識の啓発を進めていった。(守る会のミニコミ紙「町並みミニかわら版3号1983年4月)

「小樽運河研究講座」は、1978年から3年間、小樽の町の魅力、歴史的町並みの保存と再生、あるいは小樽運河の形成とその背景などをテーマに、研究者、文化人、市民運動の担い手などを講師に、毎年10回近くの講座を、市民に呼びかけて開催した。いまその貴重な記録は、市民情報セン

ターにも残っていない。立教大学共生社会研究センターに一部残されてはいるが、こうした市民運動の頂点にあたる資料が、整理されて保存・活用されていないのも、わたしたちの課題である。

小樽の、そうした運動の成果はやがて「埋め立て派」の中心でもあった小樽市商工会議所の姿勢の転換をうながした。

商工会議所は1983年8月、「埋立を再考し、全面保存の道を改めて採ってほしい」と小樽市に申し入れ、「小樽の将来は観光面に活路を見出していくべきで、特に運河と周辺の石造倉庫群がその目玉になる」と語った。（北海道新聞 1983年8月16日）

しかしこの様な新しいまちづくりを視野に入れた運動の広がりには、従来の「運河全面保存」を主張する人たちには違和感が残ったといえる。それは運動の最終局面で大きな問題となっていく。

もうひとつの問題は、市民運動と政党の関係である。運河保存運動の東京の文化人支援団体「小樽運河を愛する会」の会長の作家・夏堀正元氏は、「夢街」のわかものたちに対して「政党や労組と一線を画すという“きれいな手”でいつまで強くて底の深い運動ができるのか、統一行動をしても、主体性を失わないのが市民運動のたくましさではないか」と批判し、ポートフェスティバルについても「市民運動はお祭騒ぎではないということ、二つのあいだには接点がない」としている。（『中央公論』1980年夏季特別号）

運河保存運動は1982年には9万8千人の運河保存署名を集め、横路北海道知事のもと、小樽市、商工会議所をはじめ埋め立て派と保存派が運河問題を協議する「五者会談」を開くところまで運動の成果を広げていた。

しかし、最終局面では、まちづくりと運河保存を切り離して運動を展開すべきとする「運河全面保存派」と「政党との統一行動」をめざす勢力が一体となって「守る会」の主導権を握ろうとした。

峰山会長を中心とした運河保存とまちづくりを進める人たちは、組織の筋論など不毛な「化石のような議論」（朝日新聞1983年12月21日）に振り回されたあげく、「市長リコール運動」の時期を巡って対立した。五者会談が継続中で話し合いを進めているこの時期に「市長リコール」を提案してきたことに峰山さんたちは反対したが、最終的には「守る会」の内紛により小樽運河保存運動は終末を迎えた。1983年の秋、守る会の峰山富美さんの会長辞任により、ほぼ終焉をとげる。

小樽運河保存運動の経過について描くことがこの稿の目的ではない。小樽運河保存運動の記憶をいま書き残すのは、その後の市民運動や、住民運動、薬害エイズ問題などの場面で、なんども焦点となる課題が、小樽運河保存運動に典型的に出ていた。だからこそ、この記録に残らない記憶を、書き残す意味がある。

5 小樽運河保存運動の成果と教訓を生かしたその後の市民・住民運動——鞆の浦の例

住民運動としての保存運動が、地域の景観と、その中で生きる市民の生活をふくめて観光に活かしていくという視点は、2010年に日本では希な、行政に勝利した瀬戸内海の「鞆の浦保存運動」のときにも明確な視点を与えた。

鞆の浦保存運動のリーダー・松居秀子さんは、運動の渦中に小樽を訪れ、峰さんをはじめとした小樽運河保存運動のリーダーたちに、運動の広がりやをどうつくるか、保存運動をまちづくりにどう活かすかを聞いて、それをモデルに運動を続けて、勝利をかちとった。

鞆の浦は万葉集にもよまれた古い歴史をもち、いまま江戸時代の古い港町の雁木と呼ばれた階段状の船着き場を残し、灯台がわりの常夜灯も残っている。

1931年に制定された国立公園法で最初に指定された瀬戸内海国立公園の地区のひとつである。しかも鞆の浦の景観は「世界遺産」に登録しようという運動があるほど、優れた歴史遺産に恵まれている。

まちからはひと目で鞆の浦の入り江が見渡せて、心を癒す風景が広がっている。この風景に魅せられて、宮崎駿監督は鞆の浦に長期滞在し、アニメ『崖の上のポニョ』を構想した。その海を埋め立てて、橋を架け、道路を造ろうと福山市と広島県は計画した。

まちをつらぬく道路は江戸時代から継承されたもので、幅員が狭く車で通る場合不便であること、少子高齢化が進み、産業も衰退していることなどを理由に、1983年に県と市は県道47号線のバイパス建設を計画した。ちょうど小樽運河の保存運動の最終局面の時期に、ほぼまったく同じ動機で行政は道路計画でまちの活性化をはかるといふ方針のもと、まちの景観を押し潰そうとしていた。

実際まちの中心をつらぬく路は狭く通行する人が危険というのが、道路計画を進める市の理由だが、しかし、普段の交通量はきわめて少なく、何時間もまちを歩いていても、そういう場面にはまったく遭遇しない。

しかし、2007年に広島県が国土交通省に埋め立て免許申請を行う見通しになり、松居さんたち163人の住民が「埋め立て架橋事業停止」を求めて広島地裁に訴訟に踏み切った。埋め立て・架橋工事によって鞆の浦の景観が損なわれることに対する異議申し立てであった。

鞆の浦のこの裁判は裁判官たちが現地視察を実施するという異例の経過で注目されたが、2009年10月1日に一審判決が出て、「埋め立て架橋事業停止」を求めた原告の訴えを認めて、知事に埋め立て免許を交付しないように命じた。

松居さんたちの主張は明確である。「景観は単なる観光資源ではなく、わたしたちにとっては重要な生活環境の一部です。」海を埋め立て、常夜灯など一部を残して、景観の真ん中に橋を架けるという考え方は、歴史的景観を「点で残すことが保存だと思っていることではないか」。これは石造倉庫群を壊し小樽運河を埋め立て、一部を「運河公園」として残せばいいという発想とまったく同じである。

鞆の浦埋め立て・架橋問題は、広島知事選挙で埋め立て・架橋に慎重な湯崎英彦知事が選出され、新しい知事は2012年6月架橋計画を中止し、景観に配慮してまちの山側にトンネルを掘って道路を整備する意向を表明し、鞆の浦問題は決着した。

その後の鞆の浦を見れば、この問題は何だったかが明確になる。

2011年のNHK大河ドラマは『龍馬伝』坂本龍馬が主人公だった。坂本龍馬は1867年海援隊の「いろは丸」が紀州藩の船と衝突して沈没した事件で鞆の浦の宿に泊まって、紀州藩との交渉に当たっていたという。鞆の浦には「いろは丸記念館」があり、いろは丸の残骸も展示されている。そのいろは丸を再建した「平成いろは丸」を観光船として湾内運行しているのは、福山市である。船

は観光客で満席である。

鞆の浦は観光都市として、年間384万人の観光客が訪れ、一人当たりの観光消費額は尾道市をしのぐほどになった。（ひろしままちづくりにぎわい研究室の2012年調査）

かつて小樽で運河保存運動のわかものに「観光でめしが食えるか」と相手にもしなかった行政当局は、いまは観光客の落とす金に喜び、福山市は同じように喜びながら駐車場の狭さに愚痴をこぼしている。

小樽と鞆の浦に共通するものは、景観の中で生活する市民の願いを無視して、道路や関連施設の建築で経済を活性化させようという高度成長期の手法をいまだに踏襲する古い保守的行政の、住民を無視した強引な推進である。付け加えれば、観光や景観が焦点となり、その中で生活を求める意識的人びとの増加という時代を見通せず、後になっても反省することなく、時代にのっかって平気な行政の姿である。

6 阪神淡路大震災で「もっとも貴重」と言われた情報紙「デイリーニーズ」

1995年1月の阪神淡路大震災から、すでに19年の歳月が流れている。その年に生まれたわかものは、大学に入学すれば2年生である。19年前の学生たちはのべ120万人も神戸やその周辺の被災地にボランティアに向かった。大学生だけではなかった。受験生も高校生までいた。彼らはそこで、学校では学ぶことができないような体験をした。

都市型大震災の阪神大震災では、激甚被災地は一面の焼け野原となり、一切のライフラインが崩壊し、被災者たちは学校の体育館やテントで被災生活をしていたが、そこでは何よりも情報が求められていた。どこで炊き出しがあるのか、どこに行けば被災証明の手続きができるのか、病院はどこにあるのか、あの人は無事なのか。自分たちはこれからどうなるのか……。

その時、およそ10万人といわれる避難所生活者のために、必要な情報を提供して、被災者が必要とするものを聞いて、それを解決する方法を考える被災者向け情報紙が誕生した。ボランティア団体・ピースボート神戸の発行する「デイリーニーズ」である。

「神戸朝日病院に水がない!」「神戸市の被災用一時使用住宅の入居申込には、り災証明は必要ありません」「老人いこいの家では温かい食べ物やおにぎりを求めています」。（デイリーニーズ2011年1月26日・27日・28日号）こうした情報は震災後の混乱と情報の途絶の中で被災者が求める貴重な情報だった。

「デイリーニーズ」はどのようにつくられたか。毎朝ボランティアのわかものたちは手分けして避難所を回る。避難所生活をする人たち、お年寄りたちに「何か困ったことはありませんか？ 必要なものはありますか？」と聞いて回る。ただ聞くだけではない。時によっては、いやほとんどの場合お年寄りと話こむことになる。被災して家や、ある場合には家族からも離れて生活を強いられる人たちにとって、毎日のボランティアのわかものたちの訪問は心を支えるひとときになった。

わかものたちは、避難所で聞いてきた要望や情報を200人もボランティアの一日の終わりの全体会議で報告する。もちろん、ほかのガテン仕事（倒壊した家の片づけ、ブルーシートなどを張る

力仕事)の注文や安否情報、炊き出し情報なども含め、その中で必要な情報や要望を、必ず聞いてきた本人がまとめて活字にして、編集担当に提出し、チェックを受けて新聞記事にする。

その際、活字より手書きの紙面にする。その方が、渡された人読む人には温かみがあるからだ。そしてできあがった紙面を毎日約1万枚、朝までかけてリソグラフで印刷する。そして朝、わかものたちは刷り上がったばかりの「デイリーニーズ」を抱えて1枚ずつ被災者に渡しながら「何か困ったことはありませんか。必要なものはありますか」と聞いて回る。これはまるで原始共産制社会の新聞づくり(そんなものがあったら)である。

避難所では、「これが一番必要な新聞だ」「これがあるから助かっている」と毎日喜ばれながら、わかものたちは毎日「デイリーニーズ」を配って回る。そして彼らは毎日、取材し、意見交換し、解決方法を考え、記事にする。彼らはそのようにいわば記者としても成長するのである。

大災害の時、新聞、TVのない中で、情報が大きな役割を果たす。それは、小さなミニコミづくりで充分対応できる。それを、「デイリーニーズ」は証明した。

7 「霞ヶ関一丁目の奇跡」を生んだ“やってて楽しい運動”

その翌年1996年に、薬害エイズと闘うわかものたちの運動が盛り上がった。

誌面があとわずかなので、彼らがどのような闘いで、当時の菅直人厚生大臣の謝罪を勝ちとったかについてはここでは触れない。ただ、彼らの運動の進め方から、小樽運河保存運動の教訓がここに生きていと強く感じる。

2月16日、厚生省のまわりをミニスカートとジーンズの約4千人のわかものたちが取り囲んだのだ。制服姿の高校生や中学生までいた。それは厚生省に全面謝罪を要求して厳寒の中、座り込みを実行していた東京HIV訴訟の原告たち、つまり薬害エイズの被害者を支援するためのものだった。

年少少女たちは手に手に手製のプラカードを持っていた。そこには「あやまってよ厚生省」「僕たちは許さない薬害エイズ」など、思い思いの言葉が書かれていた。

霞ヶ関を取り囲んだぼうだいな年少少女たちを中心としたその運動の成果は、この国始まって以来の、国と製薬会社と医師の誤りを認めさせるという、「霞ヶ関一丁目の奇跡」を生んだ。

運動のはじまりは偶然からだった。上野高校時代の友人で、慶應大学の友谷さんと早稲田大学の高橋さんが、知人に誘われて社会見学のような気持で薬害エイズの裁判を見に行っただけのはじまりだった。

2人は裁判所を出てから泣いた。「こんなひどいことがあるなんて、めまいがするほどで、許せなかった」。彼女たちはそれから「HIV訴訟を支える会」の抗議行動に参加した。しかし、どうにもなじめなかった。ハチマキをして厚生省前で「厚生大臣は出てきて謝罪しろ！」

「こんなことはやりたくない。事件は許せないし裁判に勝ちたい。でもこんなスタイルはいやだ。きつとわたしたちのように感じる人がいるはずだ」

1996年3月に薬害エイズの被害者であることを告白した川田龍平くんと手をたずさえ、仲間たちと共に各大学のキャンパスで「川田龍平くんを囲む会」を開いた。東大の新入生歓迎フェスティ

誰が、どんな思いで、誰に残すのか（安東つとむ）

バルでは、800人の学生たちが集まり、終わっても帰ろうとしなかった。「やってる人が楽しそうだし、恐くない。自分もやりたい」

こうして運動は広がり、渋谷の街をラップの音楽を流してパレードし、街を歩いている人がそのまま入って来られるようなことまでやった。デモではない、パレードである。そして薬害エイズに反対するわかものたちは増殖していった。

「私たち、動員とかそういう言葉嫌いなんです。そんなことしたくないし、来てね、面白いし、これはひどい事件だから、とにかく来てねって誘うんです」

「ああいうスタイルはいやだった。だからそういうアレルギーを感じる感覚を大事にしてやっていこうと思った。とにかく普段使っている言葉でやろう。謝罪せよなんて普段いわないし、はちまきもしない。ごく日常の中に、こういうおかしいことがあればおかしいと言う。そういうスタンスでいこうと思ったんです」（『転換点の世相』小学館1997年）

おわりに～誰の、どんな思いを、誰に残すのか

薬害エイズを国に認めさせ謝罪させた彼女たちの、ほんの偶然から生まれた運動は、彼女たちの「ごく普通の生活感覚」を大切に作る姿勢から大きく広がり、一国の政府の姿勢を変えた。しかし、彼女たちの存在は、ただ記憶に残っているだけである。誰もその後の彼女たちのことは知らない。

かつて小樽運河保存運動の時、わかものたちは生活の中の小樽運河保存とまちづくりをめざして、多くの市民が参加できるポートフェスティバルや遊び感覚のイベントを開催した。そして「祭と運河保存は別物だ」という政党関係者から批判を受けた。

しかしその後、薬害エイズだけでなく、イラク戦争反対のデモでも、脱原発デモでも、秘密保護法反対のデモにおいても、一般市民が参加しやすいように政党色、労働組合色をおさえるような配慮が主催者に当然のようにある。市民が参加しやすいこと。それがあらゆる運動の基本になっている。

デモではなく、パレード色豊かな隊列もいつも登場し、参加者を楽しませている。

今は当然のようになったそれを、30年以上前から創意工夫して実現した小樽運河保存運動のリーダーたちを、歴史を超えて讃えたいと思う。

市民運動は、ミニコミに残るか、一緒に運動を担った人びとの記憶にしか残らないものが多い。それらをつなぎあわせ、担い手のインタビューなどにより再構成して、ひとつの運動の歴史を書き残す作業が問われている。

市民情報センターにある膨大な市民情報にも、それぞれ物語があるのだろう。物語の担い手の思いが秘められているのだろう。それを資料を読みながら再構成できるように整理することがわたしたちの仕事である。

それでも、資料の陰にある市民運動の歴史を語り継いでいく存在は必要である。誰が、どんな思いで、その運動を担い、どう継承されていったか。それを伝えたい。それが市民運動の担い手の一人として市民情報センターに私が参加した意味である。

この草稿を、歴史書には名を残さないが、わたしたちの環境と時代を変え、ただ記憶だけに強く

残っている市民運動の変革の担い手たちに、捧げたいと思う。

(あんどら・つとむ フォーラム色川代表幹事)

参考文献

特に注のない引用については次の資料を利用した。

『小樽運河保存の運動』『小樽運河問題』を考える会編「小樽運河保存の運動」刊行会，1986年9月

安東 恣「小樽運河保存運動の遺産～若者が拓いた街づくりの未来」『月刊タイムス』1992年11月号

「鞆の浦世界遺産訴訟に勝利した住民たち～原告団事務局長 松居秀子さんインタビュー」『nudei』5号 街風通信，2010年5月)

「デイリーニューズ」『ピースボート神戸』2011年1月～3月

安東 恣「霞ヶ関一丁目の奇跡」『月刊タイムス』1996年5月号